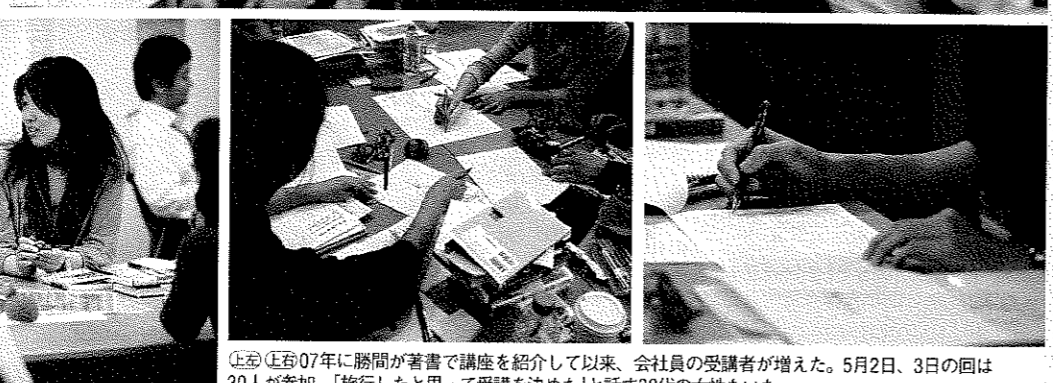


④「フォトリディング」の講座。01年、コンサルタント神田昌典が米国から導入。顧客の企業経営者から受講者を広げたこの日の講師は元読者の沢田淳子。「3週間自分だけで続けてほしい。きっと変化があるはず」と話す



⑤カッター読書会の参加者が、この日のフォトリディング講座にも参加していた写真

⑥⑦07年に勝間が著書で講座を紹介して以来、会員の受講者が増えた。5月2日、3日の回は30人が参加。「旅行したと思って受講を決めた」と話す30代の女性もいた



⑧⑨4月の日曜日、早朝から開催された「カッター読書会」。経済評論家の勝間和代のファンが、東京・新宿のファミリーレストランに集まった。参加者は20代から40代の会社員と自営業者の計9人(1人は途中参加)。普段は平日に開催することが多い



⑩ノートパソコンとウェブカメラを使い、読書会の様子を生中継。ネット経由で自宅から参加した人もいた



⑪1人2冊ずつ持ち寄りお薦め本⑫この日の進行役は芸能事務所に勤務する斉藤亜由子。フォーリーブスの担当で、今年1月の青山孝史の死を機に、「人生には限りがある。急いで勉強したい」と強く思った

た。日曜日の朝7時半、ファミリーレストランに集まったのは会社員と自営業者の計9人。1人が2冊の本を薦める決まりになっている。

進行役の斉藤亜由子(37)は、芸能事務所に勤める会社員。3年前、「尊敬する歌手の方に強く勧められたのを機に、自己投資の必要性を感じた」と言う。女性向けの経済セミナーに参加したり、成功哲学本や勉強本を読み始めた。自身の今だから勉強に時間を割ける」と思い、09年に入って早朝読書会や勉強会にも積極的に参加するようになった。

読書会で話題に上っていたのが、勝間が紹介して知名度が高まった読書法「フォトリディング」である。2日間で10万5000円の講座が、全国で毎月30〜50回開催されている。カッター読書会の参加者にも、受講者と受講予定者が1人ずついた。社会保険労務士の野崎もセミナー評論家の栗原も受講者だ。実は筆者が自己投資ブームの高まりに関心を持ったのも、この講座の開催頻度に加え、その多くが満員になっていると知ったからだ。

こちらも取材として参加した。30人の参加者は20代、30代の会社員が中心。「メールの処理速度を上げたい」「神田さんの本で知り、自分のスキルにしたいと思った」と話していた。

フォトリディングとは、「本の情報を潜在意識にダイレクトに取り込み活用する」というもの。まずは簡単に本の内容を予習し、読む目的を定める。次に本の焦点を合わせず、ぼやけたままでも1冊のページをめくり切る。さらに時間をおいて復習(活性化と呼ぶ)をする。筆者はそもそも速読の習慣があるせいか、その場で劇的な

変化は感じなかったが、参加者からは「明らかに速く読めるようになった」という声も上がっていた。

むしろ驚きだったのは、2日間、同じ課題を同じメンバーでこなしたことの高揚感。そして仲間意識のようなものが生じたことだ。「ここに来て、意識の高い人に出会えたのが良かった」と感想を漏らす人が多かった。ことにも納得がいった。同じ目的を持つ者同士との出会い。それはカッター勉強会や、そのほかのセミナー参加者も、共通して口にする言葉だった。

変化は頼りになるのは、**自己投資は心のトレーニング**

企業は頼みにならない。個で生きる覚悟が必要だと悟った人々は、頼りは自分の能力、そして人脈だけだと感じている。しかし、自分磨きのためにも「よすが」は欲しい。そこに現れたのが、成功哲学の体現者である。「会社に人生を預けるな」と説く勝間は、ロールモデルとして信奉され、道草は実業家志願者から希望の星のようにあがめられる。

流動性の高い社会に生きる私たちは、自分の哲学の源泉を何に求めるか、それを抱いてどこへ歩いていくか、自分ですべて決めなければならぬ。増え続ける成功哲学との付き合い方も、その一つ。良い悪いで語るべきことではない。言えるとしたら、これほど成功哲学が求められるのは、グローバル化した社会は厳しく、もはや気楽には生きられないと感じる人が増えているからに違いない。成功哲学を通じて人が集うのも、現代を生きる人間の自助の新しい形なのだろう。(敬称略)

自己投資に熱心に励む人の姿は、程度の差はあれ、真摯な宗教徒のように見えなくもない。セミナーに関しては、実際に何人もから「宗教です」との言葉を聞いた。

冒頭の齊藤は、自己投資の落とし穴も指摘する。「セミナーは居心地がいい。でも、勉強すればするほど自分の次の課題が見えてきて、さらに別のセミナーに行かなければと思う。こうして、セミナー地獄に陥った人を何人も見てきた」。野崎も「セミナー参加者のなかには、ただ居心地がいいから来ている」としか思えない人も言う。自己投資による高揚感から、それ自体が目的化する可能性があるだろう。

「悪い信念が病気を生む」
19世紀の米國に発想の源流

いったん整理しておこう。ここでいう「自己投資」とは、「人生において成功を取る方法」を語る成功哲学のセミナーに参加したり、主催者の著書を読んだりするという形で、金と時間を使う行為を指す。

成功哲学の源流は何なのか。ライター・速水健朗の著書「自分探しは止まらない」(ソフトバンククリエイティブ)によると、成功哲学の源流は19世紀の米國で誕生した「ニューソート」という異端キリスト教者による運動に端を発している。「悪い信念が病気を生む」というカウンセラーの心理療法が基になり、そこから「ポジティブ・シンキング」という言葉を通じて普及したのが、約70年前に登場したナポレオン・ヒルやデール・カーネギーの著作だった。この「願えばかなう」という発想は、「脳科学」や「潜在意識開発」など、

装いを替えて、さまざまな成功哲学の主唱者が繰り返して唱えている。さらに、ここ数年で人気を得ているのが経済評論家の勝間和代やコンサルタントの神田昌典を中心とした、「勉強型」の成功哲学だ。経済学者の竹中平蔵や脳科学者の茂木健一郎の勉強本も、この部類に入るだろう。一流大学卒で華々しいキャリアを誇る人が、学習や仕事のノウハウを具体的に披露するのが、勉強型成功哲学の特徴だ。

「神田さん、勝間さんは最近の2大巨頭です」と、セミナー評論家の栗原敏彰(49)は言う。神田は「集金法」を皮切りに、今では一般に知られる成功哲学の主唱者となった。神田に刺激されたのが勝間だ。勝間は、これまでにない女性の成功のロールモデルとして、著書が絶大な人気を博している。

特に近年の不況下、ビジネスマンには、会社や将来への不安が高まっている。勝間の勉強や仕事のノウハウ、そして「自立せよ」というメッセージは、彼らの心を強く打った。残業が減り、自由になった時間を勉強に充て、少しでも自分の身に付けたいという人が増えた。なかでも勝間本には本人が使った教材や本、ウェブサイトのURLまで具体的に紹介されているため、何から手をつけていいかわからない人や忙しい人でも取りかきやすい。成功哲学は起業を目指す人の精神的な支えになるばかりでなく、ビジネスマンにとつてのノウハウ本へと裾野を広げている。さらに熱心な人は、互いの勉強の成果を共有しようと、読書会を各地で開催している。

4月26日、東京・新宿で「カッター」と称する勝間ファンの読書会に参加し